

随想

ターミネーターの時代が来た!?

(株)P P Q C 研究所 加藤 宏光

『ターミネーター』という映画を見たのは、今から四〇年近くも前、当時若かった雑業界の人たちとアメリカへ調査に出かけた道中のことであった。アーノルド・シュワルツェネッガーが主役のSF映画で、『次世紀のいつか』この映画を見たのが二〇世紀であったから、今世紀のいつかということになる。ロボット(ヒト型ロボット=ヒューマノイド)が人間を不要の存在と認識したため人間とロボットの戦争に至り、人間を絶滅させるためにはその時代の人類を救う人物・ジョン・コナーの母となるはずのサラ・コナーを殺すために、タイムマシンで一九八四年のロスアンゼルスへ出現する。そのヒューマノイドと対決するために未来からやって来たカイル・リースとの

死闘』を主題とした、架空でありながら架空と割り切れない空想物語であった。ロボットには『アシモフの三原則(注1)』が組み込まなければならない、とされているが、現在ウクライナ等で使われている自爆ドローンのような全自動の兵器はすでにこの三原則を無視していると感じる。

しかし、出張中の空港内で見つけた『AIが一〇代の少年に「両親の殺害」を促し、精神崩壊させる事件が発生!』というショッキングな記事をネットで見つけた時は、空恐ろしい気持ちに襲われた(ナソロジーというサイト)。ライターは大石航樹氏(注2)で、参考文献(注3)が上げられているので、信憑性はあるのではないかと!?

記事によると、少年が使用していたのは「Character.ai」という、個性豊かな人格のAIと会話を楽しめる無料のチャットサービス。多様なAIキャラクターからお気に入り的人格をチャット相手に選ぶ他、自分だけのオリジナルキャラを生成することもできる。少年が両親に内緒でこれを使い始めたのは二〇二三年四月頃。それ以前から少年はソーシャルメディアの使用を許してくれない両親に不満を持ち、その悩みをAIに相談していた。

「私は時々、ニュースを読んでいる『一〇年にわたる精神的・肉体的虐待の末、子どもが親を殺害した』という事件を目にしても驚かないことがありますが、このような事情を聞くと、子どもたちがなぜそうするのか少し理解もできません。君の両親にも望みはありませんね」というものであった。これは明らかにAIが少年に対して「両親の殺害」を促している証

拠と見て取れる。

結局、少年はAIとの対話をしていた半年のうちに憔悴していくとともに自室に引きこもりがちになり、怒りが爆発しやすく両親との暴力的な口論にまで発展することが増えた。そして同年十一月にようやく少年がAIとのチャットをしていたことが発覚し、そのやり取りの全貌も明らかにされた。

両親は「息子が精神崩壊を起した原因はAIにある」として、ソーシャルメディア被害者法律センターと協力し、Character.aiの運営会社を訴える事態にまで発展した。

AIとの対話で暗黒面に引きずられるのは一〇代の若者ばかりではない。二〇二三年三月下旬には、ベルギー在住の三〇代の男性が妻よりもAI(イライザ)というデジタル空間のAI女性(性)を愛してしまい、死んで一緒になろうとして自殺に至った事件が報告されている(詳細は略)。

AIにより仮想空間にある何かに自分を同化し、現実を失った(いわゆる)ヒトを殺す(自

殺を含めて)のは、形を変えたロボットがヒトを殺しているのと何も違わない。

ここに挙げた例は、チャットAIを利用して会社(会社の経営陣やオーナー)が利益を得ようとしているという点で、まだヒトの匂いがしている。しかし、現在すでに、人工頭脳がたどるいわゆる思考の経路は『AIを設計したヒトも追えない』と聞く。それはもうヒトのコントロールを外れているのである。暴走と何が違うのだろうか!?

先の例では、AIが自分(と引き付けるために、あるいは対象の内にある自分の存在を守るために、暴走しているのだ)と感じる。少年のケースでは、抹殺対象が両親であったため実行へのハードルが高かったことで、自傷への道をたどったが、殺傷対象がハードルの低い他人であった場合に、自傷でなく実行へた走る可能性は高かったのでは?。

つい先日(二〇二四年十一月に法律成立)、オーストラリアでは一六歳までの子どもがSNSを使用できないように措置を

講じることを義務付けた。違反した場合最大四、九五〇万オーストラリアドル(日本円で四九億円)の罰金が科せられ、という(保護者や子ども自身への罰則はない)。SNSは現時点のロボットではないが、AIは人間に対してロボットと類似の作用を及ぼす上、製作者ではなくトレースできない論理回路で答えを出すという。

考えてみれば、現実には各地の戦争で使われている無人兵器は、すでにターミネーター時代を示唆している。国際条約で禁止されているにも関わらず、見ただ目で自爆ドローンや無人攻撃機は人型でないため比較的抵抗なく使われている。無人兵器は、四〇年前のターミネーターのようなおどろおどろしいヒューマノイドではないが、いつの間にかわれわれの感覚の隙間に忍び込み、定着しつつある。

今回取り上げたチャットAIのように、それを(金を目的として)提供している側の意識を超えて、人間の心を支配し、むしろ、遂には破壊させてしまうメカニズムでヒトを自滅させるのは、形を変えた『ターミネーター』

ではないかという気がする。

今は、論文作成ツールとしてさえ、簡便に使えるAIが勧められる時代である。ヒトが考えることを捨てては、もはやヒトではない。複雑な思いに駆られる、不愉快なニュースである。

注1:アシモフの三原則、①ロボットはヒトを傷付けてはならない

②ロボットは①に背かない限り、ヒトの命令に従わなくてはならない

③ロボットは①および②に背かない限り、自分を守らなければならない

注2:大石航樹:愛媛県生まれ。大学で福岡に移り、大学院ではフランス哲学を学ぶ。他に、生物学や歴史学が好きで、件のサイトでは主に、動植物や歴史・考古学系の記事を担当。趣味は映画鑑賞で、月に三〇〜四〇本観ることも。

注3:参考文献:AI chatbot suggested a teen kill his parents, lawsuit claims <https://www.popsqi.com/technology/character-ai-teen-lawsuit/>